

關敬吾博士をしのぶ

臼田 甚五郎

關敬吾博士は平成二年一月二十六日に逝去された。關さんへの思ひ出は昭和八年ごろにさかのぼる。今泉忠義先生の主宰する國學院大學方言研究會で、柳田國男先生の御論稿を巻頭にすゑて、全國の風位名を総覽する資料を出版することになり、先輩鈴木棠三さんにつれられ、柳田先生の成城邸の書齋で口述を筆記することになった。それから時折木曜會に出席する幸運に恵まれた。今から思へば、柳田先生を太陽として、日本民俗學の青春を輝かす惑星の座が形成されてゐた。その中で、四年後月刊誌『民謡研究』の同人仲間となつた倉田一郎さんもゐた。学生服の傍聴者は私と歌森太郎さんくらゐだつた。木曜會では、橋浦泰雄さん・大間知篤三さんたちがよく声をあげてゐた。關さんはどちらかといふと寡黙の風があつた。しかし、昔話のことになると、柳田先生は關さんの方に話をむけてをられた。關さんはいはゆる立板に水の能辯ではなく、口にもるような話し方でよくこたへて居られた。昔話について、柳田先生の信頼が厚かつたことは、幾つもの民俗採集手帖の中で、『昔話採集手帖』は先生と關さんの共編であつたと思ふ。月刊誌『昔話研究』も同様であつた。

昭和の昔話研究は、言ふまでもなく開拓の鉞は柳田先生によつて打ち込まれたが、その女房役は關さんであり、柳田先生亡き後は關さんによつて耕耘され、立派な収穫を見た次第である。

平成二年九月に出版された『民話の世界』（飯島吉晴編・有精堂発行）が日本の昔話研究を回顧し展望するのによからうと思つて披くと、關さんに始まつて、私の孫弟子くらゐまでの二十一名の研究者の論文が収まつてゐる。巻頭の「民俗学的昔話研究の課題―昔話の調査と昔話の生物学―」は、昭和四十九年八月発行の『昔話傳説研究』へ關さんが寄せてくれたものである。ちなみにこの誌名は私が命名したもので、日本の口承文藝研究に昔話と共に傳説が並んでほしかつたからである。中國の大陸をば、黄河と長江がうるほすやうにである。

關さんは、当然初代の日本口承文藝學會長になられたが、二代目の私にむかつて、會長は學界をリードする論文を執筆し発表しなければならぬと言はれた。不敏の私はその義務を果し得なかつたことを責めなければならぬが、關敬吾博士こそまさにその大任を遂げた人である。十五年前に書かれたとは言へ、「民俗学的昔話研究の課題」の一篇は、今日もなほ學界を指導する気魄にあふれた遺言の如き文章である。ただ不思議な縁を感じるのは、最近に於ける新しい研究分野を開示した三つの二つに挙げた武田正氏の『木小屋話』『佐藤家の昔話』と野村純一君の『吹谷松兵衛昔話集』とが、いづれも私の序文を掲げて世に出た書であることだ。さうして、關博士の記筆によつて、日本のみならず世界に於ける視点で位置づけられた。つまり、關敬吾博士こそは昔話研究をば理論的に國際學界へ推進してくださつた恩人である。

（國學院大學名教授）